

平成30年6月13日現在

機関番号：25406

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2014～2017

課題番号：26380556

研究課題名（和文）映画祭の統合的マネジメントモデルに関する実証研究

研究課題名（英文）Empirical study on the integrated management model of film festivals

研究代表者

矢澤 利弘（Yazawa, Toshihiro）

県立広島大学・経営情報学部・教授

研究者番号：50563219

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、映画祭を成功に導くためのプロジェクトマネジメントの展開方向を明らかにすることである。特に持続可能性のある映画祭の特徴の抽出に焦点を当てながら、映画祭のマネジメントに関する統合的な論理モデルを構築することが目的である。この研究では、全国の映画祭の実地調査を行い、映画祭の特徴とマネジメントの状況についての定性的分析を実施した。その成果として、映画祭を長期にわたって継続させるための組織マネジメントの成功要因についての経営モデルを導出した。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to clarify the direction of project management development to lead the film festivals to success. The aim is to build an integrated logical model on the management of the film festival, focusing on the extraction of characteristics of the sustainable film festival in particular. In this research, a field survey of film festivals throughout Japan was conducted, and a qualitative analysis on the characteristics of the festival and the management situation was carried out. As a result, I derive a management model on the success factor of organization management to continue the festival for a long time.

研究分野：経営学

キーワード：映画祭 プロジェクトマネジメント 組織経営 映画上映 映画 地域活性化 イベント 映画産業

## 1. 研究開始当初の背景

本研究の背景には、まず研究代表者（矢澤）が取り組んできた映画祭に関する個別の研究成果を発展させ、体系化する必要性があったことがあげられる。

コンテンツ産業は先端的な新産業分野のひとつとして位置付けられ、今後大きな成長が見込まれるとともに、その戦略的な活用によって、周辺産業に大きな波及効果をもたらす。そのなかでも映画はその代表的な地位を占め、世界各地で開催されている映画祭は、映画の流通と映像産業の振興のほか、人材の発掘と育成、地域活性化など、様々な効果を有している。だが、映画祭に関する先行研究のほとんどは、上映作品に注目した人文科学の領域での研究であり、映画祭を経営学的な視点から行った先行研究はわずかであった。そのため、映画祭についてはその組織経営的な実態が分析されてこなかった。

そうしたなか、日本では、映画祭の時代的な変容を指摘した研究や、映画祭をソフトパワー理論に関連付けながら分析した研究などが行われてきたが、論文は数件にとどまっていた。一方、米国では2009年以降、映画祭に関する学術論文集“Film Festival Yearbook”が毎年発刊されているなど、映画祭の学術的研究が徐々に進みつつある状況であった。

こうした流れのなか、研究代表者は映画祭に関する研究を積み重ねてきた。映画祭に関する研究代表者の従前の研究成果としては、

映画祭を取り巻くステークホルダーの諸活動についての実証的研究、非営利組織経営論の視点から複数の地域映画祭を比較分析した研究、映画祭の創出をテーマにした研究の3つに分類することができる。本研究はこうした映画祭分野での経営学研究を応用・発展させる必要性を背景に開始されたものである。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、映画祭を成功に導くためのプロジェクトマネジメントの展開方向を明らかにすることである。特に持続可能性のある映画祭の特徴の抽出に焦点を当てながら、映画祭のマネジメントに関する統合的な論理モデルを構築するのが目的である。

映画祭には映画の流通と映像産業の振興のほか、人材発掘、地域活性化などの様々な効果が期待されるが、多くの映画祭はそのミッションを達成していない。本研究はこれまでの研究代表者の研究成果を基礎に、映画祭の観察によるケーススタディと映画祭関係者に対するオーラルヒストリー分析を中心に、映画祭の組織行動を経営学的に評価・分析することによって、コンテンツ産業の拡大による

日本経済の発展と国際競争力の強化、映像による地域活性化に結び付けるものである。

## 3. 研究の方法

本研究を進めるに際しては、以下の方法によった。

映画祭に関する研究を進める前提として、日本における映画の定義、映画に関するビジネスモデル、日本における映画の会計実務についての現状を把握する。

国内における映画祭の実施状況を把握し、関連するデータを蓄積するために、国内映画祭のデータベースを構築し、更新する。

国内の映画祭の現状を分類して整理すると共に、その特徴を明らかにすることを目的として、日本国内で実施されている映画祭について、主に視察によって、経営学的な視点からその実施状況とマネジメントの状況、特徴を把握する。

映画祭におけるプロジェクトマネジメントの構成概念を整理し、概念的な枠組みを構築するために、映画祭とイベントマネジメントの先行研究と議論について、米国を中心とする主要文献を利用してまず明らかにする。そのうえで、これを基にして分析フレームワークを構築する。

各映画祭のプロデューサーと映画祭を取り巻くステークホルダーを対象として、オーラルヒストリーを実施し、インタビューデータの内容分析を行い、映画祭のマネジメント手法を把握し、その特徴を抽出する。

構築された分析フレームワークに基づいて日本の映画祭のマネジメントの実態を測定・評価して分析した。事例研究を通じて、映画祭のマネジメントにおける普遍的な諸変数を抽出してモデル化する。

## 4. 研究成果

以上の研究目的とそれを達成するための研究方法に即して、本研究は進められた。映画祭のマネジメントに関する世界的にみても先行研究が少なく、特に日本においては研究が積み重ねられた分野ではない。そのため、ある程度は試行錯誤によって研究成果をまとめるを得ない部分もあった。そのため、部分的な成果が確認できた順に、段階を踏んで研究成果を発表してきた。

本研究の成果は(1)論文及び学会発表等に関するものと(2)資料的なものとに分類することができる。

次の「5.主な発表論文等」が(1)に属する成果である。

映画祭に関する研究を進める前提として、日本における映画の定義、映画に関するビジネスモデル、日本における映画の会計実務についての現状を把握するという目的について

は、「映画制作費の資産計上と費用配分の会計実務に関する考察」において成果の発表が行われた。この論文においては、映画業界のビジネスモデルを文献研究によって明らかにしたうえで、日本の複数の映画製作会社の会計実務の現状を調査し、事例分析を行った。その結果として、米国基準及びIFRSによる映画制作費の会計処理を斟酌して、それらの諸要素を日本の会計実務に導入することによって、日本の映画製作会社の会計実務がより合理的な処理へと移行することができることを示した。

国内の映画祭の現状を分類して整理すると共に、その特徴を明らかにするという目的に関しては、の「短編映画祭における人材育成の現状と課題」においてその一部がまとめられた。この論文では、映画祭の分類の一類型である短編映画祭について、国内外の短編映画祭を文献調査したうえで、国内の短編映画祭の事例研究を行った。

その結果として、短編映画祭における人材育成機能をモデル化することができた。

研究に当たっては、札幌国際短編映画祭（北海道）、すかがわ国際短編映画祭（福島県）、京都ヒストリカ国際映画祭（京都府）、広島国際アニメーションフェスティバル（広島県）の現地調査とインタビュー調査で得られたデータを活用した。その点で当該論文は、映画祭の観察によるケーススタディと映画祭関係者に対するオーラルヒストリー分析を中心に、映画祭の組織行動を経営学的に評価・分析するという目的にも合致したものである。

また、国内の映画祭を分類・整理して、その論理モデルを導出するという目的に関して、研究期間の後半は、野外映画祭の現地調査と分析を重点的に実施した。その成果は、

の「野外上映型映画祭の現状と展開方向」においてまとめられている。これらの論文の作成に当たっては、星空の映画祭（長野県）、逗子海岸映画祭（神奈川県）、夜空と交差する森の映画祭（愛知県、山梨県）の現地調査で得ることができたデータを活用している。この論文では、野外映画祭が観客や地域に対して、どのような機能を有しているのかについて、一定の仮説を導出することができた。

また、野外映画祭に対する考察を深化させたの「景観活用型映画祭の実践的意義」では、景観活用型映画祭という概念を導出したうえで、その意義を考察することができた。この論文では、みゆき野映画祭 in 斑尾（長野県）、瀬戸田映画祭（広島県）、うみぞら映画祭（兵庫県）の現地調査で得られたデータを活用している。この論文では、景観活用型映画祭がどのような特徴を有し、また、利害

関係者や地域に対しての映画祭の有用性についての仮説を導出することができた。

さらに、日本映像学会第44回大会での発表「野外映画祭における映像制作ワークショップの現状と意義」は、栃木・蔵の街かど映画祭（栃木県）でのフィールドワーク調査で得られたデータなどをもとにしたものであり、映像産業における人材育成の一つの類型を示すことができた。

また、映画祭のマネジメントに関して、いくつかの日刊紙からの取材を受け、映画祭のあるべき方向性についてのコメントを提供した。例えば、野外映画祭については聖教新聞2017年7月15日付朝刊、ゆうぱり国際ファンタスティック映画祭については北海道新聞2018年4月1日付朝刊、なら国際映画祭については、読売新聞2018年5月1日付朝刊（奈良面）に研究代表者のコメントが掲載されている。これらにより、研究成果の一部を社会に対して広く発信することができたと考えている。

次に（2）の資料的な成果については、現地調査を実施した映画祭で記録した映画祭の運営状況についての静止画及び動画、映画祭の主催者及び出品者などに対するインタビューの録画・録音記録の蓄積が挙げられる。これらは、編集され、教育用の教材作成及び論文作成に使用されている。

例えば、以下に掲げる写真は景観活用型映画祭の現地調査において撮影されたものであり、順に、兵庫県洲本市で開催された「うみぞら映画祭」（写真1）、長野県飯山市で開催された「みゆき野映画祭 in 斑尾」（写真2）、栃木県栃木市で開催された「栃木・蔵の街かど映画祭」（写真3）、愛知県の佐久島で開催された「夜空と交差する森の映画祭」（写真4）である。

最後に今後の展望について述べたい。研究期間内に蓄積されたが、論文として具体的に発表することができなかった調査データが一定数存在する。これらは今後さらに分析を継続し、総括的な映画祭に関する文献として編纂・出版する計画である。

（写真1）うみぞら映画祭



(写真2) みゆき野映画祭



(写真3) 栃木・蔵の街かど映画祭



(写真4) 夜空と交差する森の映画祭



## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

矢澤利弘「映画制作費の資産計上と費用配分の会計実務に関する考察」『広島経済大学経済研究論集』第37号第3巻、2014年、51-65頁。査読なし

矢澤利弘「短編映画祭における人材育成の現状と課題」『広島経済大学経済研究論集』第37号第4巻、2015年、47-60頁。査読なし

矢澤利弘「野外上映型映画祭の現状と展開方向」『広島経済大学経済研究論集』第38号第3巻、2015年、7-20頁。査読なし

矢澤利弘「景観活用型映画祭の実践的意義」『県立広島大学経営情報学部論集』第10号、2017年、85-100頁。査読なし

〔学会発表〕(計2件)

矢澤利弘「野外上映型映画祭の実践的意義」日本映像学会第42回全国大会、2016年、日本映画大学(神奈川県)

矢澤利弘「野外映画祭における映像制作ワークショップの現状と意義」日本映像学会第44回大会、2018年、東京工芸大学(東京都)

〔図書〕(計1件)

矢澤利弘「『Viva! 公務員』公務員に固執する男を描く痛快コメディ」、映画『Viva! Italy vol.3』劇場公開プログラム、共著、2017年、4-5頁。パンドラ

〔産業財産権〕

本研究は該当せず

出願状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等  
特になし

## 6. 研究組織

(1)研究代表者

矢澤 利弘 (YAZAWA, Toshihiro)  
県立広島大学経営情報学部・教授  
研究者番号：50563219

(2)研究分担者 ( )

研究者番号：

(3)連携研究者 ( )

研究者番号：

(4)研究協力者 ( )